



Title	クリストファー・ドレッサーの装飾デザインにみる色彩論の展開
Author(s)	竹内, 有子
Citation	デザイン理論. 2019, 73, p. 66-67
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/71188
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

クリストファー・ドレッサーの装飾デザインにみる色彩論の展開

竹内有子 大阪大学

はじめに

近代の西欧においては、芸術産業における「色彩」の役割が重要になった。とりわけ1820-30年代にかけては、色彩調和に関する実験的研究が化学者たちによって開始された。こうしたなか、19世紀後期の英国では「官立デザイン学校 (Government School of Design, 1863年に National Art Training School と改称、現在の Royal College of Art)」の教師陣が、化学者ジョージ・フィールド (George Field, 1777-1854) とシュヴルール (Michel Eugène Chevreul, 1786-1889) の色彩論を援用しつつ、色彩教育を実施した。同校を卒業した産業デザイナー、クリストファー・ドレッサー (Christopher Dresser, 1834-1904) もまた、自著『装飾デザインの原理』(1873年)の中で色彩の項を設け、「色彩調和論 (colour harmony)」に多くの頁を割いている。しかし、ドレッサーに関する先行研究においては、彼が著した色彩論について論述したものは殆どない。さらに彼の提唱する色彩調和論が、彼自身のデザイン製品に適用されたのか、同理論がどのような要請のもとにデザイン活動に反映されたのかについても未だ考察されていない。本発表は、ドレッサーの著述と装飾デザインを手掛かりに、色彩論がデザインに適用された展開について検討するものである。

1. ドレッサーの色彩論と提言

1873年、クリストファー・ドレッサーは『装飾デザインの原理』を上梓した。ここでドレッサーは、色彩論を4項目「一般的考察、対比、調和、色彩の性質」に分けて、総計27

命題を提出する。「一般的考察」では6命題が規定される。これらは、フィールドの『色彩学 (Chromatics)』(1817年)、続く『色彩論 (Chromatography)』(1835年)で発展された調和的な混色の法則、次項の「調和」で説かれる「等価色彩 (Chromatic equivalents)」の基本を成す。次の「色彩の性質」においても、諸命題はフィールド論に基づく。最後の項目「経験上の教訓」においては、ジョーンズの『装飾の文法』「命題29-34」に通じる教えが説かれる。ドレッサーが色彩論の最終部を通じて強調する、最もよい色彩調和の事例とは、「完璧なインドの織物」にみられる「豊かで、光輝くような (bloom)」効果である。そして各製品の章を総じて、装飾と着色には、東洋の製品が理想的モデルとして見出された。

彼はさらに、室内の装飾デザインに関する知識と技法を伝えるべく『デザイン研究 (Studies in Design)』(1874年)を著した。この中から浮上する重要なデザイン上の概念が、「安らぎ (repose)」である。ドレッサーは続けて、「過不足のない状態から生まれる安らぎ」における最高位の感覚は、「鮮やかな色を用いるところで達せられる」という。彼は、壁に「中和的效果をもつ色彩」を使うよう提唱し、三次色の壁に各原色を用いた装飾パターンを組み合わせる、調和的な色彩計画を教示した。彼にとって、色彩調和は、芸術的インテリアを達成する必須要件なのであった。

2. 理想的モデルとしての東洋製品

ドレッサーに先駆けて、「適合性」と「色彩調和」を根拠に東洋の製品を評価したのは、

レッドグレイヴとジョーンズであった。特にジョーンズは、材質と技術に優れた東洋のテキスタイルが視覚にもたらす複雑な色彩の効果、光の働きによって変化する表面の色と光沢に魅了されていた。

ドレッサーは、絨毯に関する論文を『英国の製造産業 (*British Manufacturing Industry*)』(1876年)に執筆した。本論でドレッサーは、フィールドの色彩理論にある三原色の中和化(無彩色化)の援用を、絨毯の役割に鑑みて推奨した。また続けて、「ペルシア人もインド人も色彩の多様な方法を採用している」といい、「幾何学性を基盤とする、細かな星か花のような文様パターンが、光の明暗の変化をもたらす」完璧な技術に注意を促した。ドレッサーはこのように、手仕事で作られた品質の高い東洋製品の模範をいかに産業に適用するかについて、実地で追究していた。

3. ドレッサーの平面デザインにみる色彩

『デザイン研究』に掲載されたドレッサーの装飾図版、つまり室内装飾に企図された平面装飾には、フィールド論に基づく①三原色・二次色・三次色の使用に加え、②それらの明暗度の変化を駆使し、③補色対比で調和を生む法則に則って、色彩が用いられている場合が多い。興味深いのは、ドレッサー自ら「装飾がある地との色彩調和の研究」と記し、小パネルの中央用装飾として考案した、図版25である。この装飾は、原色を根本に、二次色・三次色を使用した、いわば色彩実験であった。

テキスタイル製品とドレッサーの関わりは、彼のデザイナーとしてのキャリアのうち、最初期から始まり、その後も大きな割合を占め続けた。これを踏まえ、本発表では、著作権登録された、ナショナル・アーカイヴが開示しているデザイン見本を紹介した。閲覧可能なドレッサーのファブリックおよび壁紙の資

料106点を実見したうち、彼の色彩論の内容を顕著に反映していたのは、絹織物であった。特にドレッサーの理論書が発表された時期に近い、ワード社の絹織物製品を対象を絞った。具体的には、1872年に著作権登録された絹ダマスク織(番号268062)が、調和的な色彩配合を直接的に表すものであった。

おわりに

ドレッサーの色彩論がデザインに企図したものは何であったのか。それは、距離を置いてみたときに対象に生じる、色彩の輝く効果である。ゆえに、建築のインテリアとその空間を構成する平面装飾が、色彩論を適用する主な対象であったといえよう。そして色彩の「輝き」を示す模範となったのか、東洋のテキスタイルであった。東洋の絨毯やショールに用いられた、抑えた色調と調和的な色使い、自然模倣に依らない装飾パターンは、デザイン改良に着手したヘンリー・コールのグループ一派に示唆を与えていた。

ドレッサーは、「安らぎ」という概念を基に、芸術美の目的に色彩調和を参入させた。本発表では一面的ながら、ワード社の絹織物製品を取り上げて、同時代の色彩論の適用例をみた。ただ、絨毯・壁紙・掛け布等に対するドレッサーのアプローチは、色彩調和論の応用か否かだけの問題に留まらない。テキスタイルの色彩を取り巻く彼のデザイン実践は、美的インテリアを形成する契機をも内包していた。ドレッサーの場合、「適合性」を基盤とする室内装飾の構想にあって、彩色は常に自覚的な位置を占めた。観者の目は、美的インテリアを構成する各部位の装飾、および形態と色彩の総合をもって、室内全体の統一性へと導かれる。ドレッサーの色彩論の展開は、この「総合性」への志向にある。